①　一番苦しかったのはやはり終戦後、在鮮中の最初の一カ年でした。気候にも慣れず、食糧不足と栄養失調で生死の境を彷徨したときです。反対に、キシロフスクの二年間は収容所生活としては極楽であったと言えましょう。

②　ソ連兵の知能程度が低かったため、人員点呼などでは随分長時間立たされたが、その他の面では比較的気楽であったのではないかと考える。

③　引揚船で吊るし上げられた者も、抑留中、ソ連側の要求にだれかは応えなければならない存在とするなれば気の毒な感もする。

懐かしの日本の土を踏んだのは、昭和二十三年十二月三日（永徳丸）であった。四～五日後、郷里の伯父さん方へ帰り、農業の手伝いなどしているうち、早田仁君（一年後輩、当時食糧事務所勤務）のお世話により二十四年十月、農林省和歌山統計事務所印南出張所（当時、作物報告事務所）に入所。翌二十五年、百合子と結婚、伯父の家を離れて独立する。昭和五十八年十二月、定年退職。その間、二男を養育。

現在　長男　大阪近畿銀行勤務
　　次男　大阪において自動車販売修理（自営）
　　爺婆夫婦二人で梅栽培に専念中です。

シベリア抑留

島根県　足立光雄

昭和十三年三月、三刀屋尋常高等小学校を卒業し、母の実家において魚介類販売に従事。母、姉の三人暮らし（父は別居中）。昭和十七年魚介類が統制となり、関東州大連市（父の居住地）の満鉄子会社に就職中、昭和二十年五月、臨時召集により間島省延吉市の通信隊に入隊、無線通信に従事した。通信器材は普通であったが、小銃は三人に一丁くらいで、交戦用武器は「ゼロ」に等しかった。

昭和二十年八月九日朝、非常呼集で分隊編制、延吉市郊外に無線通信隊として一個分隊八名くらい（？）で戦闘配置につき、終戦までその態勢で、終戦と同時

に延吉市の本隊に合流、武装解除され、しばらく兵舎で待機していた。

入ソは国境を徒歩で越えた。位置不明で幕舎生活しながら、食糧は自給（コーリャン）で、期間は覚えていない。やがて貨車に乗せられ（日時不明）コムソモリスクに到着した。

十月八日ごろと思う、既に一帯は白雪におおわれていた。帰るまで第二分所生活、シラミ、南京虫に悩まされた。時たま衣服の熱風消毒、一週間に一回くらいと思う。入浴身体検査が、入所後かなりたってから行われた。

作業は上下水道の穴掘り、農場の手伝い、芋掘り、製粉工場、貨車からの物資運搬など、種々の作業をさせられた。

農場で「ふかし芋」を食べさせてくれたときは非常に嬉しかった。

労働時間は、朝八時整列点呼の後、それぞれの作業場に引率されて行き、夕方五時、時季により四時まで作業させられた。昼食は一時間の休憩があり、ノルマについては別に記憶がない。

食事は黒パン、雑穀の雑炊で、米はなかった。肉（缶詰）、油、野菜は極く少量のため、紫斑病が若干出た。作業場で昼食休みのときに野草を採り、ゆでて食べた。休みについては覚えていない。極く低温、猛吹雪のときには休みがあった。

一年半くらいたってから、演劇に趣味のある人々が演劇を始めた。たまの休日には、洗濯したり、だれかれとなく故郷の食物、思い出を話し合って時を過ごした。

収容所はかなり大きく、一棟に二百人くらいいたと思うが、棟数については記憶にない。

冬季はペーチカを焚く。窓は小さな二重窓で、採光は悪く昼間でもあまり明るくなかった。このような極限状態の中で生きるためには何よりも気力が大切と思い、仲間と助け合ってがんばった。その際、若さというものが大きかったと思う。

帰国の知らせはコムソモリスク第二分所で、昭和二十二年五月だったと思う。

ナホトカに連行されたときと同様、貨車で移動した。ナホトカで八月中旬ごろまで土木作業をし、八月下旬に舞鶴港に上陸し、故郷に帰りました。

帰国後中小企業に就職していたが、二十五年春より魚介類の統制が解除されたので、魚介類販売を行う。その後若干の紆余曲折はあったが、現在まで頑張っています。

シベリア抑留記

福島県　大和田　正　巳

大正六年十一月十一日、福島県田村郡中妻村大字斉藤字斉藤七〇番地に出生す。

昭和十一年三月、県立田村中学校卒業。昭和十二年、満鉄営口商業実習所給費生に合格、渡満。営口にて一年間教育を受ける。昭和十三年一月十日、会津若松歩兵二九連隊留守隊第二大隊重機関銃中隊入営。四月十七日、ハルビン歩兵二九連隊本隊配属。五月十三日ハルビン出発、徐州作戦従軍。十三年六月、ハルビン駐屯地帰着。七月十五日、牡丹江省掖河駐屯、約一年。昭和十四年七月張鼓峰作戦出動。九月六日、ノモンハン事変従軍。十月、牡丹江省掖河帰着。昭和十五年十月十八日、現役延期解除、除隊。

昭和十八年ごろ　勲八等旭日章、従軍記章並びに赤十字記章受領。

兵役除隊後、鶏西炭砿ハルビン本社に就職、東安省鶏西炭砿工業所経理担当。昭和十八年、密山炭砿ハルビン事業所に転勤。昭和二十年七月二十二日、臨時召集のため第一三一旅団挺身隊応召（ハルビン防衛部隊）。

ソ連軍侵攻

八月九日、ソ連軍による空襲、市内展開。ハルビン市中心部で戦車壕を掘る。

八月十五日、ラジオで重大放送（敗戦を知る）。

八月十六日以降、北満からの避難婦女子の救援等に忙殺されたが、引き続き武装解除され、ハルビン郊外の兵舎へ移動滞在。八月下旬～九月上旬、ソ連の指示